

ゾロアスター教徒の衣裳：西アジア収集の回想

著者	藤井 知昭
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	1
号	2
ページ	427-430
発行年	1976-07-20
URL	http://doi.org/10.15021/00004655

ゴロアスター教徒の衣裳
——西アジア収集の回想——

藤 井 知 昭*

1. はじめに

A. トインビーの死を知ったのは、昨年10月23日の正午ごろであった。イスタンブール調査の間をぬって、ゴールド・ホーンの流れをまたぐガラタ橋下の安レストランへ、ひさびさに魚を食べに行ったときのことである。同席のトルコ人の男がテーブルに残した新聞を、何気なく拡げていると、“イギリスの歴史家、A. トインビー、86才で死す”という写真入りの記事が目にと焼きついた。23日付のヘラルド・トリビューン紙である。

トインビーが『歴史の研究』の構想をいだき始めたのは、まさに、このイスタンブールを発したオリेंट急行に乗って、西方に向かって旅出たときのことであった、という記憶がおぼろげながら急速に蘇がえっていった。

車窓に展開するトラキアの田園風景に、この地方の栄光と血ぬられた過去に想いをめぐらし、あるいは、満月の光に照らし出されたベラ・パラソカの峡谷の美しさに圧倒されたという。そして、“それ

でも、私はその晩床につく前に、ノート
の半頁に論題のリストを書きつけている
自分に気づいたのだった。このリストは、
その内容及び順序において、今日あるこ
この本の構想と実質的に同じものであっ
た。……”(筆者訳)と述べたトインビー
の回想を、のちに見出したのだった。

50年前、1921年、トインビーが乗車し
たイスタンブールのシルケジィ駅が、こ
このレストランのすぐ先に見える。駅に向
って歩きながら、『歴史の研究』に触発
されたこと、とりわけ、*Between Oxus
and Jumna* をよむ中で、アフガニスタン
をはじめ西アジアへの関心が深く大きく
広がっていった10年ほど前のことを想い
出していた。ホームにたたずみ、オリエ
ント急行に乗りたいたいという衝動にから
れながら、4カ月ほどにもなるイランと
トルコの調査を思い返していた。

西アジアの調査の日々の中で、数多く
の人たちとふれ合い、そして、収集した
資料の1つ1つにも、さまざまな思い出
がこめられている。以下は、それらの中
から、ゴロアスター教徒にかかわるエピ
ソードの1つを選んだ小文で、調査報告
というより、収集の回想ともいえるべきも
のである。

2. ゴロアスター教徒の衣裳

国立民族学博物館の収蔵庫に、1枚の
ワンピースの着物が収まった。昭和50年度
の収集品の1つとして、イランのヤズド
から大切に持ち帰ったものである。赤・
白・緑の三色の絹でつくられた女性の衣
服である。今、手にとってみると、他の
地域べるで収集した色彩豊かな民族衣裳

* 国立民族学博物館第2研究部

と比とあまり見比べがしない。

* * * *

イランのほぼ中心部、北方からカビール、東からルート¹の2つの巨大な砂漠が、ザグロスの山系に打ち寄せて拡がった波打ちぎわの小石のように、砂漠に包まれてヤズドの町がある。飛行機で飛べば、首都テヘランから1時間余りのヤズドも、汽車では夜行急行でもたっぷり13時間はかかる。

典型的な内陸の町で、年間降雨量50ミリ以下という1,200メートルほどのこの高原の町は、カナートから流れ出る水以外には、地表の水は存在していない。

ヤズドには、多くの興味をもちつづけていたが、今回は、特に大きく2つにしばった調査の目標をたてていた。第1は、このヤズドは、カナート掘り職人ムッカニの拠点であり、彼らはイラン全土を中心に、アフガニスタンや遠く北アフリカにまでも出かけて、カナート掘りの仕事に従事したという。カレーズという呼称もあるが、この町のムッカニたちはカナートと呼んでいる。しかし、近年、豊富なオイルダラーを背景に、イラン政府は、動力による水資源の開発に力を注ぎ、ムッカニたちの動態にも、さまざまな変化が現われ始めている。このムッカニの動態を調査するとともに、彼らのカナート掘りの仕事唄を記録する目的をもっていった。ムッカニたちの固有な音楽の中に、遠征先の諸地域の音楽との相互交流の影響をとどめているからである。

ヤズド調査の第2の、そして主たる目的は、ゾロアスター教の典礼と教徒たちの社会組織や意識構造などを調べることにあった。

現在、インドのボンベイとこのヤズド

だけに、ゾロアスター教の伝統的典礼が継承されている。古代において、世界の巨大宗教に先がけるようにペルシアを中心に西南アジアなど広域に拡がり、ペルシアでは国教でもあったゾロアスター教は、やがてイスラム教にその地位を譲り渡していった。拠点であるこのヤズドですら、現在は1万人に満たない教徒を残しているにすぎない。

中世以来、ヤズドはイスラム教の敬虔な祈りの地として、到る所にマスジッド（回教寺院）があり、尖塔がそびえている。しかし、著名なマスジッド・ジョメ（フライデー・モスク）の裏手には、ユダヤ人たちの居住区が集中し、そのほぼ中央にはユダヤ教の拝殿もひっそりと存在している。

このヤズド周辺の住居は、椀をふせたようなドーム型の屋根をもち、半地下式の構造だが、アフガニスタン南部のカンダハルあたりから西方に、イラン東南部に多く見かける型である。猛暑などきびしい気候に対応した建物である。どの家も高い土塀をめぐらし、それが連続してつながっている。塀の一隅には嚴重な門をつけた木製の小さな扉が設けてある。土塀の間を曲りくねった小路が、露路のようにつづき、時折小さな広場に出る。広場には必ずといえるほど、カナートの水流に降りる階段の入口が設けられている。浅くて3メートル、深いものでも10メートルほども地下に降りると、冷たく清らかな水の流れにたどりつく。

マスジッドが立ち並び、バザールが幾重にもつながる町の中央部や、ユダヤ教徒の居住区などとは離れて、ゾロアスター教徒たちの居住区がある。そのほぼ中央に、松の木が繁り、とりどりの花が咲

き、たわわにざくろが実る庭園に囲まれて、アーテシュケデ（拝火殿）が建てられている。

初めてこの拝火殿を訪れた日、子供を亡くした夫妻のために、供養の法要が営まれていた。神殿の内陣の中央には、アフラマズダを讃える火がほのおを高く燃やし、内陣の外には3人の僧が経典・アヴェスタからヴィーデヴダート（除魔法）を朗唱している。アヴェスタは、このヴィーデヴダートやヤスナ、ヤシュトなどの書から成るが、ヤスナの一部に詩篇ガーターを含んでいる。ガーターはゴロアスターの啓示、彼の行った説法などを伝えたものである。このガーターの朗唱がゴロアスター教の典礼音楽の中心である。

異教徒のわれわれも、神殿の入口に用意されている白色の布か帽子をかぶれば、外陣までは入ることが許される。モベットと呼ぶ僧の1人に話しかけると、彼はボンベイから派遣されたインド人で、数年この地に留って祭祀や伝道に従事するという。理解の早いこの若いモベットは、早速調査の目的達成のため翌朝、ヤスナの典礼をわれわれのために捧げてくれるという。

ガーターの朗唱は、イスラム教のコーラン、ヒンドゥー教のヴェーダの朗唱ときわめて類似するばかりではなく、グレゴリアンチャントやユダヤ教の讃歌とも共通している。それぞれの宗教の成立において、相互に影響し合ったためか、あるいは、宗教における讃歌は自然に類似してゆくものかを考えたいと思っている。流れるようになめらかで、きわめて音楽的な抑揚をもつ、メリスマ的な朗唱である。この拝火殿に通う間に、門番の老人、雑役の老婆やその娘と親しく話し合うよ

うになった。

カナートの水をたよりに、僅かの畠を耕して自給的な生活ながら、貧しくとも敬虔な祈りの暮しをつづけていたゴロアスターの教徒たちの上に、近年さまざまな変化が起り始めたようである。豊富な外貨を背景に、イラン政府は、近代工業の育成と発展を政策として、この内陸の町ヤズドでも、自動車の部品工業をはじめ、いくつかの軽工業が始められた。よく知られたヤズドの手織りの織物工業も、次第に機械化されつつある。一方では、イラン全土に氾濫する車の流れは、ヤズドもまた、絶好の中継地にし、貨幣経済とインフレの波がこの町に押し寄せてきたのである。

伝統を守り、比較的保守的な生活を営む教徒たちは、これらの潮流に一步おくれを取ったことが原因して、生活に多くの打撃を受けることになってしまった。涙ながらに暮しの苦しさを語る老婆の訴えも、旅人にとっては、なぐさめ、同情をすること以外にはなすすべもなく、話題を変えていった。食事のこと、衣服のことなど、ハレ着に話題がいったとき、老婆は自分の部屋から1枚の着物を持ち出してきた。この老婆が結婚のとき祖母よりもらった大切なもので、100年ほど前に作られたものだという。絹でつくられ、赤・白・緑の、まるで三色旗のように色鮮やかなものである。レバースと一般的に呼ばれるが、ピロハーンという呼称もあり、この下に、シャルバル・ガブリなどと呼ぶズボンをはくのがしきたりである。老婆は、昔、若かった頃、祭りの日にはこれを着て若者たちの注視を浴びたとなつかしんでいる。娘の婚礼に持たせてやりたいと思うのだが、娘は今

風のデザインの着物が欲しいというようである。興味深く手にとって眺めていると、娘は突然、買って来てと言いだして、老婆と口論を始めてしまった。

近年、これらの古い民族衣裳が買い漁られて、法外な値がつきテヘランの土産物屋に並び、ヨーロッパなどに流れていることは知っていた。しかも、それらの中には、最近土産用に作られたものも多いことを聞き知っているだけに、本物のゾロアスター教徒の衣服は、わが国立民族学博物館の資料のためにのどから手が出るように欲しいと思った。しかし、老婆の気持を考え、夢を破ってはと言い出しかねているうちに、老婆と娘の口論は治った。娘が説得したようで、老婆は、いくらで買ってくれるかと尋ねてきた。テヘランの土産物屋や骨董屋につるしてある衣服の値段を、コンピューターのよように、思い出し、平均値を想定し、良心などいろいろ思い悩んだあげく、半分ほどの値をつけた。老婆と娘の有様に神経を集中してじっと眺めた。2人は互いに顔を合わせて瞬きを交したかと思うと、相好をくずし大声で売ったと叫んだ。2人の考えた額より相当高い値段だと気づき、一瞬値切ろうかという気持が通りすぎたが、もともと当方はやや安いと思う金額であったし、これで娘の婚礼の新しいハレ着が買えるなら、一緒に喜ぼうという

気持になっていた。

ある一日、ヤズドの町はずれにひっそりとたたずまいを見せていた、沈黙の塔として知られるダホメ(鳥葬の丘)を訪れる。焼けつくような陽光を浴びて登る道は、丘をめぐる折れ曲る急な坂である。かつて、白布に覆われた死者が、教徒たちにかつがれた姿を想い浮かべながら、はるか下に見下す砂漠の中に、点々とカナートの穴跡がつづいている。ダホメの鉄扉は固く閉ざされさびついて開かない。くずれた壁の一隅を乗り越えて内に入る。散乱する骨片、風化した衣服の断片が風にゆらぎ、空を飛ぶ鳥の姿もない。丘と町の間の一画に、新しく造られたゾロアスター教徒の墓が並んで見える。沈黙の塔は、さらに深い沈黙の世界に入ったようである。

砂漠に沈もうとする真赤な太陽が、絶えることなく燃えつづける拝火殿の炎のゆらぎと重なって、あらためて火の文明を考えていた。火と太陽の中に、アフラマツダの神を見出すことはできなかったが、砂漠に生きる人々の知性を深く感じていた。

1枚のゾロアスター教徒の衣裳、赤と緑と白の色彩の中に、彼らの祈りと願いを見出している今、この衣裳を眺める度に、ヤズドの人々との日々を想い出すことであろう。